

説明ターゲット

次の原稿不鮮明な部分あり

1085 ~ 1611

5 年 9 月 24 日

主務者又は

撮影立会者

加部東保夫



1085

九 六

保存期限	永久	決裁指定	決行指定
------	----	------	------

大臣	政務次官	事務次官	局長	主務局長	主務課長	主務課員	主務副官	主務御用掛	書記官	審案	審記者
件名	航空機彈藥九四式百發爆彈及同五式五十發爆彈假制式制定件										
受領番號	參第六〇三號										
起元應(課)名	陸軍技術本部										
受領	昭和九年七月十三日										
提出	昭和九年八月九日										
大臣受領	昭和九年八月九日										
大臣了結	昭和九年八月九日										
連帶	局長										
決行(決裁)後	局長										
決行(決裁)後	局長										

政務次官 同付
決裁前連帶
後課名

決行
三下

決行(決裁)後
回覽課名

副官ヨリ陸軍技術本部長へ通牒
 首題彈藥七月十二日附陸技本甲第三七九號上申
 ノ通定メラルルヘキニ付該圖面(概説共)百三部送付セ
 ラレ度

陸普第四八五八號

昭和九年八月拾日

右圖面送付アリタル後左案決行相成度

副官ヨリ別紙配布表ノ箇所へ通牒

首題彈藥別紙圖面ノ通定メラルレニ付該圖面(概

説共)

部送付ス

陸普第七〇〇五號

昭和九年七月廿一日

昭和九年七月廿日

第三師團	第二師團	師團(除第三第三師團)	築城部本部	航空本部	技術本部	造兵廠	兵器本廠	教育總監部	兵器局	配賦箇所	部數	配賦箇所	部數
		(二五)各一	一	九	七	四	一	五	一	臺灣軍	一	關東軍	一
計						支那駐屯軍	要塞各			配賦表			一〇三

九四式百發爆彈
九四式五十發爆彈

四 配賦表



別紙添付

陸技本甲第三七九號

陸軍省 陸軍大臣 官房

陸軍省 陸軍大臣 官房 9.7.13

陸軍省 陸軍大臣 官房 9.7.13 第四号 統砲課

航空機彈藥九四式百疋爆彈及同九四式五十疋爆彈假
制式制定並同彈藥細目名稱表改正ノ件上申

昭和九年七月十二日

陸軍技術本部長 緒方

陸軍大臣 林 銑 十 郎 殿

首題彈藥ハ審査ノ結果實用ニ適スルモノト認ムルヲ以テ假制式トシテ制定セラレ
度左記圖書相添へ上申ス

左 記

- 一 航空機彈藥九四式百疋爆彈圖 一 部
- 一 同 九四式五十疋爆彈圖 一 部
- 一 同 九四式百疋爆彈概說 二 部
- 一 同 九四式五十疋爆彈概說 二 部
- 一 同 細目名稱表 二 部

1089

九四式百発爆弾概説

昭和九年六月
陸軍技術本部



陸

軍

九四式百斤炸彈概説

昭和九年六月
陸軍技術本部

第一 審査ノ目的及用途

本炸彈ハ威力ヲ増大シ且体ヲ一般用繼目無鋼管ヲ以テ製作シ製造ヲ容易ナラシメ以テ十二年式百斤炸彈ニ代ルヘキ破壊用炸彈ヲ得ル目的ヲ以テ設計審査セルモノニシテ主トシテ堅固ナラサル目標ノ破壊ニ用フルモノトス

第二 構造

本炸彈ノ外形ハ圓壘型ニシテ彈丸ハ彈頭、体、彈尾及翼ヨリナル彈頭ハ一口徑ノ楕形ニシテ鍛鋼品第五種ヲ以テ製作シ前端ニ九三式投下二働信管ヲ螺著ス体ハ一般用繼目無鋼管ヲ以テ製作シ内部ハ炸藥室ヲ成形ス彈尾ハ圓壘形ニシテ外部ニ翼ヲ綴著シ塞底ヲ介シテ十二年式投下彈底信管ヲ螺著ス翼ハ厚サ二耗ノ鋼板ヲ以テ製シ四箇ノ長方翼ヲ圓壘形ノ彈尾ニ綴著シ翼ノ端末並中央部ニ於テ各四箇ノ支板ヲ以テ相互ニ連絡シ取扱中ニ於ケル翼ノ變形ヲ防止ス

彈体中央部側面ニ一箇ノ吊環ヲ設ケ航空機塔載横吊用ニ供ス
 炸藥ハ動員當初ニ於テハ被包式熔製茶褐藥ヲ使用スルモ戰時ニ在リ
 テハ他ノ炸藥ヲ代用シ又ハ被包ヲ用ヒス直接填實スルコトヲ得

第三 效力及諸元

本爆彈ノ全備彈量ハ約一〇九匁五〇〇ニシテ其ノ炸藥收容率ハ約四
 一%ニシテ彈道性良好ナリ

彈頭信管ハ堅硬目標ニ對シ彈体破壊ノ虞アル時瞬發裝定ヲ有利トス
 ルモ本爆彈本來ノ用途ニ對シテハ一般ニ延期裝定ヲ本旨トス
 參考ノ爲本爆彈ト十二年式百匁炸彈トノ效力並諸元ヲ比較スレハ次
 ノ如シ

效力		形 狀	種	
並諸元			九四式百匁炸彈	十二年式百匁炸彈
効 力	高 度	圓 壜 彈	八米二〇〇	八米〇〇
	ヨリ砂地上ニ		七米八〇	七米八五
投 下	深 サ	流 線 彈	七米八〇	七米三〇
	セ ル 場 合		二米〇〇	二米三〇

諸元		ノ漏斗孔	体積
中 徑	全長（信管頭 ヨリ翼端迄）	空 彈 量	炸藥量（被包 熔融茶褐藥）
〇米二四〇	一米三九二	六二尙〇五	四五尙五〇
〇米二七〇	一米七〇一七	四八尙九三〇	六一尙九九〇
		約一一三尙〇〇	一〇九尙五〇
			四八、三立方米
			四八、七立方米

第四 審査経過ノ概要

本爆彈ハ昭和七年十月審査ニ著手シ昭和八年七月第一回試製品ヲ以テ伊良湖射場ニ於テ砂井戸試験靜止破裂試験並ニ投下試験ヲ實施シ其ノ結果彈体抗力概ネ適當ニシテ威力又十分ナルヲ認メタリ然レトモ使用セル九二式投下大彈頭信管及九二式投下大彈底信管ハ本爆彈外形ニ比シ稍過大ニシテ彈道性良好ト認メ難キヲ以テ之ニ代ル九三式投下二働信管及十二年式投下彈底信管ヲ使用スル如ク修正セル第

二回試製品ヲ完成シ昭和九年五月陸軍航空本部ニ實用試験ヲ委託シ
同年五月伊良湖射場ニ於ケル濱松陸軍飛行學校爆撃演習實施ノ際實
用試験ニ附シタル結果彈道性彈体抗力概ホ良好威力又適當ニシテ實
用ニ適スルノ判決ヲ得タルヲ以テ茲ニ審査ヲ終了シ昭和九年六月假
制式制定ノ上申ヲ爲シ得ルニ至レリ

1094

九四式五十疋爆彈概説

昭和九年六月
陸軍技術本部



陸軍

九四式五十疋爆彈概説

昭和九年六月
陸軍技術本部

第一 審査ノ目的及用途

本爆彈ハ威力ヲ増大シ且体ヲ一般用繼目無鋼管ヲ以テ製作シ製造ヲ容易ナラシメ以テ十二年式五十疋爆彈ニ代ルヘキ破壊殺傷用爆彈ヲ得ル目的ヲ以テ設計審査セルモノニシテ主トシテ輕易ナル目標ノ破壊並曝露及掩蔽下ニ在ル人馬殺傷ニ用フルモノトス

第二 構造

本爆彈ノ外形ハ圓壩型ニシテ彈丸ハ彈頭、体、彈尾及翼ヨリ成ル、彈頭ハ約一口徑ノ蛋形ニシテ鍛鋼品第五種ヲ以テ製作シ前端ニ九三式投下二働信管ヲ螺著ス体ハ一般用繼目無鋼管ヲ以テ製作シ内部ハ炸藥室ヲ成形ス彈尾ハ圓壩形ニシテ外部ニ翼ヲ綴著シ塞底ヲ介シテ十二年式投下彈底信管ヲ螺著ス翼ハ厚サ二耗ノ鋼板ヲ以テ製シ四箇ノ長方撥翼ヲ圓壩形ノ彈尾ニ綴著シ翼ノ端末ハ四箇ノ支板ヲ以テ相互ニ連結シ取扱中ニ於ケル翼ノ變形ヲ防止ス

彈体中央部側面ニ一箇ノ吊環ヲ設ケ航空機塔載横吊用ニ供ス
 炸藥ハ動員當初ニ於テハ被包式熔製茶褐藥ヲ使用スルモ戰時ニ在リ
 テハ他ノ爆藥ヲ代用シ又ハ被包ヲ用ヒス直接填實スルコトヲ得

第三 效力並諸元

本爆彈ノ全備彈量ハ約四七呎八〇〇其ノ炸藥收容率ハ約四二%ニシ
 テ彈道性良好ナリ

曝露人馬ノ殺傷並彈体破壊ノ虞アル堅硬目標ニ對シテハ彈頭信管ハ
 隣發裝定ヲ有利トスルモ本爆彈本來ノ用途ニ對シテハ一般ニ延期裝
 定ヲ本旨トス

參考ノ爲本爆彈ト十二年式五十呎爆彈トノ效力並諸元ヲ比較スレハ
 次ノ如シ

效力並諸元		彈種	
九四式五十呎爆彈		十二年式五十呎爆彈	
形狀		圓樽型	
流線型		流線型	
高度七百米ヨリ 砂地上ニ投下セ	長徑 七米〇〇	短徑 六米八〇〇	七米〇〇 六米九〇〇

元 諸		效	
全備彈量	約四七疋八〇〇	約五三疋	
炸藥量(被包 熔融茶褐藥)	一九九 〇九 〇九	二八疋九七	
空 彈 量	二五疋七九〇	二二疋五九	
全長(信管頭 ヨリ翼端迄)	一米〇七四	一米三二三五	
中 徑	〇米一八〇	〇米二〇五	
ル場合ノ漏斗孔	深サ 一米七〇 体積 二五立方米六	一米七五 二六立方米四	

第四 審査経過ノ概要

本爆弾ハ昭和七年十月審査ニ著手シ昭和八年七月第一回試製品ヲ以テ伊良湖射場ニ於テ砂井戸試験静止破裂試験並投下試験ヲ實施シ其ノ結果彈体抗力十分ニシテ彈道性良好威力適當ナルヲ認メタリ
茲ニ於テ昭和九年五月陸軍航空本部ニ實用試験ヲ委託シ同年五月伊良湖射場ニ於ケル濱松陸軍飛行學校爆撃演習實施ノ際實用試験ヲ實施シタル結果彈道性彈体抗力概ネ良好威力又適當ニシテ實用ニ適ス

ルノ判決ヲ得タルヲ以テ茲ニ審査ヲ終了シ昭和九年六月假制式制定ノ上申ヲ爲シ得ルニ至レリ

陸軍省 第六四五號

陸技本甲第六四五號

航空機彈藥九四式百砵及五十砵爆彈圖面並概說
送付ノ件通牒

昭和九年十一月十九日

陸軍技術本部副官 岡田

陸軍省副官 牛島 滿 殿

本年八月十日附陸普第四八五八號通牒ニ係ル首題ノ圖面並概說
參通送付ス

追テ現品ハ陸普番號押捺ノ上銃砲課へ直送可致ニ付承知セラレ度

(圖面) 概說 貳枚
(圖面) 概說 貳枚
(各百)



陸軍